



特集 イデオロギーよりアイデンティティ

9月30日に投開票が行われた沖縄県知事選挙は、辺野古新基地建設反対を掲げる玉城デニー氏が、396,632票という過去最多の得票数を得て、当選を果たしました。今回、安倍政権の推薦を受けて立候補した佐喜真 淳氏は、本土から数多くの著名人を呼び込み、また大量の支援者を動員して、総力戦の構えをとりながら、残念ながら、約8万票の大差で敗れました。

今回のこうした沖縄知事選は、7月に辺野古埋め立て承認撤回の意思を公にしながら、わずか10日あまりの後の8月8日、ついに命を尽くされた、故翁長雄志前沖縄県知事の「イデオロギーよりアイデンティティ」という言葉を、わたしたちの心に深く刻印するものとなりました。「沖縄」アイデンティティ。沖縄アイデンティティの勝利。このことは、「本土」に何を迫り、それは、日本社会に、どんな変化をもたらすでしょうか。

沖縄基地問題の「現実」対応

■ 屋良朝博（ジャーナリスト）

沖縄は現実的に対応できないのかねえー。

沖縄県知事選挙から数日。那覇空港の待合室で新聞を広げていると、隣にいた60半ばのおじさんが話しかけてきた。玉城デニー沖縄県知事が米軍普天間飛行場を名護市辺野古へ移転する計画に反対する意向を県議会で表明したとの記事が地元紙1面を飾っていた。「現実対応」を求める日本の無責任が沖縄問題の本質なのだ。

選挙で沖縄の有権者が「辺野古反対」の民意を示した直後も政府は辺野古埋め立てを強行している。玉城新知事が直接対峙するのは民意をないがしろにする安倍政権だが、その背後には沖縄への基地集中を「現実的だ」と容認する日本の多数世論がある。この歪んだ認識が沖縄問題の核心なのだ。

空港待合室で基地問題の見出しが躍る地元紙に見入っていた地元の中年男を見つけたおじさんは、興味本位で議論をふっかけたのだろう。

米海兵隊の普天間飛行場が住宅地の真ん中にあるって、危険だから人口の少ない辺野古沿岸部へ移設する。危険だから「一日も早く」、辺野古移転が「唯一の選択肢」と政府は繰り返し主張している。移転先の住民には気の毒だが、応分の見返りがあるはずだ。現実的に考えれば政府案に乗ってもいいのではないか。本土人のおじさんには沖縄人がなぜ頑なに抵抗するのか理解できないのだ。

筆者は「現実対応なら政府に求めてくれませんか。埋め立てを含め移設事業に何年かかるか知っていますか」と尋ねた。饒舌だったおじさんは首をかしげた。「一日も早い」とはいつまでか、という基本的なファクトが置き去りにされている。

辺野古の飛行場建設は順調に工事が進んでもおよそ10年かかるといわれている。しかし、実際には見通せないのだ。現時点で工事は予定よ

り3年も遅れている上、現場の海底地盤がマヨネーズ状に軟弱であることが調査で判明した。土壌改良が必要となった。

さらに大型公共工事には途中の設計変更が不可避で、それには沖縄県の承認が不可欠だ。埋め立て反対の知事は承認を拒否するため、政府は県を相手に提訴することになる。最高裁の判断までに数ヶ月を要する。そんな設計変更が多くて10回を超える可能性もあるのだ。

総事業費は1兆円といわれる。民意無視、工期不明、巨額の血税。それが辺野古埋め立て事業である。普天間の危険性を認識しながら、長期を要する辺野古工事を「唯一の選択肢」と固執するのは政治の不作为だ。本土の遊休飛行場を使ったほうがよっぽど現実的だ。

しかし政府は本土移転を封印する。米軍基地は「地理的優位性」のある沖縄に限る、と主張する。

この解説も根拠がない。海兵隊が本土へ移転すれば普天間の代替は不要で辺野古埋め立ての必要もなくなるため、まずは海兵隊が沖縄以外でも運用できるのか否かを検証すべきだ。結論を先出しすると、米軍の中で最も緊急展開に優れた海兵隊が、沖縄なしには動けません、なんて弱音を吐くはずがない。

だから地理論はこじつけた。そもそも海兵隊は移動・出撃するための艦艇、輸送機を沖縄に置いていないのだ。艦艇は長崎県佐世保の米海軍港だ。仮に朝鮮半島有事を想定すると、佐世保の船が沖縄で隊員と物資を拾い、再び北上する。九州に駐留した方がよっぽど機動性は上がるはずだ。大型輸送機は米本国から飛来するのを待つしかない。

防衛省は海兵隊が沖縄に駐留する理由について、ハワイや米本国と比べ北東アジアに近いと説明している。米本国と比較するなら、日本全国どこも同じではないか。政府の言い分

は実にキテレツだ。

そんな状況を説明すると、本土のおじさんはこう吐いた。「そりゃ本土ではみんな米軍基地が嫌だからどこも引き取らないよ」。この言葉が沖縄人の琴線に触れる。やや厳しい口調で、「それは破廉恥ではないですか」と詰めた。

沖縄は日本の国土面積のわずか0.6%でしかない。在日米軍基地の7割を押し付けるのはあまりにも不条理だ。「日本防衛のため」「日米関係が大事」と言いながら、基地負担は嫌がる。海兵隊は当初本土に駐留したが、住民の反対運動が激しくなったため、沖縄へ移転した歴史さえ忘れられている。

海兵隊は1953年、朝鮮戦争の休戦協定直後にDPRK（朝鮮民主主義人民共和国）を警戒するため日本に配備された。岐阜、山梨、静岡、大阪、奈良に分散していた。そのころ、日本各地で米軍基地に反対する住民運動が盛んだった。石川県内灘、長野県浅間山、群馬県妙義山では射撃場の設置計画に住民が激しく抵抗し、計画を断念させた。東京立川飛行場の拡張に抵抗した砂川闘争がよく知られている。

1956年の米国務省文書によると、日本の反基地運動を懸念した米側は本土から撤退し、沖縄を主要基地とすることにした。同年、海兵隊は沖縄に移転した。沖縄はすでに米空軍と陸軍の基地があったため、新たな基地用地を確保するため米軍は銃剣で住民を追い払い強制的に土地を接収した。

米陸軍がベトナム戦争後に沖縄を去り、現在は海兵隊が在沖米軍の最大兵力で、基地の7割を占有する。普天間問題も東村高江のヘリパッド問題もオスプレイの強行配備もすべて海兵隊の駐留に起因する。本土の反基地運動が沖縄への基地集中を招いた歴史を忘却し、いま沖縄の反基地を非現実的だと批判するのだ。

政府は2014年、沖縄の負担軽減を目的に普天間配備の輸送機オスプレイの飛行訓練の一部を佐賀県佐賀空港へ移転しようと試みた。ところが地元の反発であえなく断念した。

安倍晋三首相は国会で「移設先となる本土の

理解を得られないなど、さまざまな事情で（沖縄基地問題は）目に見える成果が出なかった」と答弁し、本土側の無理解を認めた（2月2日の衆議院予算委員会）。

たかが訓練の一部移転を拒む佐賀の反対は許容され、沖縄の反対は強引に抑え込む。沖縄の反基地には「日米安保を否定するのか」「現実的になれ」といった批判を向ける。選挙で繰り返し示される沖縄の民意からは目を逸らす。そんな差別を本土は認識さえしていない。

沖縄問題は結局、英語のNIMBY（ニンビー、Not In My Back Yard、私の裏庭はやめて）ということだ。

本土の無責任、身勝手を指摘すると、“現実対応”のおじさんは口数が減ったが、それでも食い下がってきた。「沖縄は基地の見返りに予算を多くもらっている」と言い出した。言い方を変えると、金をくれてやるから言うことを聞け、ということだが、これも誤解と偏見に満ちている。政府からの予算配分を人口一人当たりの割合で比較すると、沖縄は一度も全国トップになったことはない。島根、鳥取、高知が上位の常連で、沖縄はずっと10位前後だ。

それでも沖縄の基地見返り論が日本で蔓延するのは政府の情報操作が成功しているということだが、民意を抑え込むため餌をしゃぶらせる政治に疑問を抱かない国民性はかなり危うい。

空港で会ったおじさんが口にした「現実的対応」をそろそろ本土側に迫る時期かもしれない。海兵隊は普天間の機能を佐賀へ移し、地上戦闘部隊を自衛隊訓練場がある大分、補給部隊を輸送船がある長崎へ配置すればすっきり収まり、機動力も維持される。他の選択や組み合わせはいくらでもある。当選した玉城デニー知事が全国に基地負担を求める時、本土はその声に向き合えるだろうか。

沖縄の民意を黙殺することで日本人は安全保障を得る。8月に急逝した翁長雄志前知事は生前、「甘えているのは沖縄ですか。本土ですか」と問うていた。玉城知事もこの問いかけを受け継ぐことになる。

宮古島で今、何が起きているのか？

■ 坂口聖子（日本キリスト教団宮古島教会牧師）

宮古島（沖縄県宮古島市）の教会に赴任してから約一年半が経った。東洋一美しいと言われるビーチがあり、年間約100万人くらいの人々がこの島を訪れる。宮古島は沖縄島と台湾のちょうど真ん中に位置している。私は「離島」という言葉があまり好きではない。どこを中心として「離島」なのかと考えるからである。東シナ海に浮かぶ小さな島は沖縄県でありながらも、それぞれ独特の文化を花咲かせてきた。

私は横浜生まれ、そして横浜育ちである。生まれてから約40年、横浜に住み続けてきたいわゆる「ハマっ子」である。私が思い浮かべる「海」は横浜の港であり、また湘南の江ノ島あたりの灰色の海である。それは、宮古島のどこまでも透き通る、そして緑を含む独特の色合いの、あの海の色ではない。私が宮古島に初めて来た時にこの「宮古ブルー」と呼ばれる海の色に魅了された。豊かで素朴な島の自然に恋をした。今でも朝早く、ビーチに出かけ、時間があればシュノーケリングを楽しむ。しかし、今、この島は様子が変わろうとしている。

ちょうど今から約4年前になるが、南西諸島の自衛隊配備が決定され、宮古島には島嶼（しよ）防衛のためのミサイル基地が建設されている。建設が始ったのは2017年の11月だった。私が宮古島に赴任して間もなく、住民の反対を押し切り、新しい基地の建設が始まった。島の自然が壊されていく様を目の当たりにしていく。宮古島は山がなく、標高の一番高いところでも115メートルほどしかない。飛行機から見るとよくわかるのだがのっぺりしている。ちょうど島の真ん中が、一番標高が高い部分にあたるが、そこにはかつての沖縄戦の時代から基地があり、今でも航空自衛隊の駐屯地がある。そこからほど近い旧千代田ゴルフ場に新しい基地が建設されている。工事は早いもので2019年の3月には着工を終え、約800人の自衛隊員が島嶼防衛の



宮古島

ためと宮古島にやってくる。基地建設はこれだけにはとどまらない。ミサイル基地ができるということは、ミサイルを保管する弾薬庫が作られる事である。島の東の保良（ボラ）という地域にである。元々は琉球大理石を掘っていた鉾山跡地に建設されようとしている。この保良鉾山から住民が暮らす集落までは約200メートルしか離れておらず、この採石場からは保良カトリック教会の白く美しい屋根と、その上にそびえ立つ十字架をはっきりと見ることができる。しかし、火薬法取り締まり法の基準と照らせば、住宅地から400メートルの保安距離は必要にも関わらず、法令を適応せずにこの建設が進められようとしている。また、宮古島の平良港は現在クルーズ船を停泊させるための岸壁工事が急ピッチで進められている。これは単に観光のためだけではない。島嶼防衛の名の下に琉球弧への投入を目的に、海上自衛隊最大の護衛艦「いずも」級（クラス）を空母として改裝し、垂直離着陸も可能な「F35B戦闘機」とともに、宮古島の平良港での運用が予想されるのだ。あげればキリがないくらい島のあちらこちらで基地

建設が静かに進んでいる。

宮古島には山がない。山がないから川がない。宮古島で暮らす住民たちの飲料水や農業用水などは全て地下水に頼っている。雨水が自然に地下に貯められ、それを利用している。住民だけではなく多くの観光客もこの水を利用する。現在、宮古島と橋で繋がっている伊良部島、下地島はもともと日本航空のパイロット訓練のための飛行場であるが、2019年3月末からはこの空港と成田空港を直行で結ぶ計画があり、さらには香港、上海、台湾とも国際線が飛ぶ予定になっているため、島では大型リゾートホテルの建設も進んでいる。来年には今年以上の観光客が宮古島にくることが予想される。もし、自衛隊員800名とその家族が宮古島に移住すれば、地下水は枯渇する可能性もある。それだけではない。ミサイルの成分は鉛が含まれる。鉛が地下水に浸透してしまえば、水道基準法に接触し、飲み水も農業用水も使用できなくなる恐れがある。地下水が一度汚染されてしまえば、元に戻るまで1500年もの期間を要することになる。私たちの世代だけではどうすることもできない大きな問題になるのだ。新しい基地ができることは戦争を作り出すことであり、環境が汚染（破壊）されることでもある。

この美しい島には誰一人として住めなくなってしまう可能性がある。市長はいまだに国の専権事項と言って新基地建設について住民に説明責任を果たしていない。

宮古島や他の南西諸島は昔から保守層の強い地域である。それは経済と密接に関係をしているためであろう。イデオロギーだけでは解決できない根深い問題が存在している。実際にミサイル基地建設現場の前で反対のアピールをしているとダンプカーの運転手に「反対するなら、金をくれ！」と叫ばれることもある。その一方で、イデオロギーよりはアイデンティティというのは、故翁長雄志知事そして現在の玉城デニー知事にも引き継がれており、沖縄県民の切実な願いであることも確かだろう。沖縄の自己決定権を取り戻す、日本を守るために沖縄が再



ミサイル基地工事現場の前でプラカードを掲げる坂口牧師

び犠牲になってはならない、軍隊は住民を守らないとの骨身にしみ込んでいる教訓であり、住民の4人の一人が亡くなった沖縄戦の痛みからの叫びである。

私は沖縄生まれではないため、「本当に沖縄の人たちの苦しみがわかっているのだろうか？」と自らを省みることもしばしばある。そして「沖縄人ではない私がここにいるのはどんな役割があるのだろうか？」と常に考えている。

聖書は言う。「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」(マタイ5・9)。

平和は神の創造の出来事と密接に繋がっているのだろう。「言葉」はヘブライ語では「ダーバール」と言い、それは「言葉」と同時に「出来事」と訳される。神の創造の出来事、「極めて良かった」と神がこの自然を創造された、私たち人間はそれを守る使命があるのだ。神を信じるキリスト者として現場に身を置き、課題を担うことでしか神の出来事に参与することはできないのではないだろうかと考える。小さな島からそれを思い、平和を創り出すことから全てが始まると祈り、信じ続け、日本や世界の平和を創ることを、日夜、あきらめずに希望をもって歩んでいる仲間たちとの連帯を祈りつつ、目指している。

高江は今…

■伊佐育子（那覇教区信徒、「ヘリパッドいらない」住民の会）

ヤンバル（沖縄県沖縄本島北部森林地帯のこと）も台風が過ぎて秋らしくなり、小鳥たちは忙しそうに食べ物を求め飛び回っています。ゲート前テントの強制排除から2年、今は静かな生活を取り戻すための座り込みを続けています。テントにホントウアカヒゲが訪れます。姿は見えませんがヤンバルクイナの鳴き声がすぐそこに来ているように聞こえます。ヘリパッド建設工事で鳥たちを森から追い出しておきながら、テントは森の一部に受け入れられたらと思うのは、人間の傲慢さゆえなのでしょう。

非暴力の座り込みを始め9年目。ヘリパッド建設は法的根拠も示さず、機動隊、警察、警備員と国の財力と権力のあらゆる手段で税金を94億円も使って、たった5ヶ月間で造りました。そのヘリパッドとヘリパッドに続く道路工事があまりにもお粗末な突貫工事だったので、返還式典後も補修工事が必要となり、現在、2本の道の改修工事が、昨年に引き続き今年6月末から32年2月末までの工期で、6億円の予算で入札されています。

いつ工事が始まるか分からない中、土曜日はシスターも一緒にゲート前での座り込みを続けています。日本政府は警備員を雇い、24時間体制で北部訓練場を守っています。

わたしたちは11年前から、ヘリパッドが6カ所も出来てしまったら高江で暮らせなくなると国に訴えてきました。現実には、オスプレイが高江集落の住宅の上、学校の上、畑の上を飛行しています。負担軽減とは程遠く、まるで米軍の訓練場の中に集落があるようです。もちろん、騒音は倍増し、そしてついには昨年10月には一番恐れていたヘリの事故が起きま

した。高江の住民の私有地である牧草地に、煙を上げたヘリが墜落炎上しました。もし牧草地で仕事をしていたら、集落の中だったら、民家の、学校の、自分の家だったら。こんな事故が起こらないために9年も行動し訴えてきたのに、本当に起こってしまったという恐怖と絶望で、その炎を呆然と見ていました。

今、高江住民は騒音だけでなく墜落の恐怖の中で暮らしています。高江の墜落直後、普天間では同じ機種へのりの部品や窓枠が落下する事故が2件ありました。高江で事故を起こした米軍が沖縄県の要望を聞いて、他の機体の点検をしていたら防げた事故です。沖縄県民の命より米軍の訓練が優先されています。すぐに高江区民、東村村議会、沖縄県議会でもヘリパッドの使用中止を求めて声をあげました。故翁長雄志前知事に続き、9月に翁長知事の意味を受け継いだ玉城デニー知事も公約にヘリパッドの使用中止を求めています。

日本政府は、さらに伊江島、宮古島、石垣島、与那国島、奄美大島に自衛隊基地を造り、沖縄の負担軽減のためという口実で、なんとグアムにまで海兵隊の住宅や庁舎を立て実弾演習場まで造る計画です。

テントは静かになりました。高江の闘いは孤独ではありません。同じ思いと体験をしている島々と繋がり声を上げています。この声をもっともっと国内外に広げたい。繋がることも諦めない。これからの活動が一つ増えました。

今、日本の片隅の高江から、誰かの犠牲の上に平和と正義はありえないことを伝えています。

「宗教と政治 沖縄県知事選挙をふり返って」

■ 二見伸明 (元公明党副委員長)

9月の沖縄知事選では、玉城候補に対立する佐喜真淳候補の応援のため、公明党の支持母体である創価学会は、沖縄県内に数千人規模とされる大勢の人員を本土から投入しました(10月3日琉球新報)。ところが意外にも多くの創価学会票が、玉城候補に流れ、これが玉城当選に繋がりました。11月8日の「平和をつくり出す宗教者ネット」集会では、20年近く公明党中央執行部におられた二見伸明氏に、目前に迫る改憲の危機も視野に置いて、今回の沖縄知事選をふり返っていただきました。

改憲発議は、2019年通常国会だと思います。2/3で可決できるのは、今度の通常国会しかない。それが終わって参議院選挙になります。参議院選後は2/3は無理ですから、通常国会中に発議案を通さなければならぬ。そして、公明党がこれにノーと言え、その瞬間改憲発議はダメになります。ですから、公明党に顔を立てて、自衛隊9条には手をつけないのではないかと思います。だけど、大きな災害があった場合に政府が大きな権限を持ち、政令が法律と同じ扱いになる緊急事態条項。これは通す。なぜなら、実際にはこちらに実があるからです。これは、ヒットラーの全権委任法に似ているんです。当時ナチスは中央党というカトリックの政党を手なづけて、この法律を通してしまいました。ところが2、3年後に結局、中央党はナチスによって解党されてしまいます。そういう歴史がある。公明党を手なづけるのなんて簡単なのです。何かあった時に政府が動けるようにというのは、もっともらしく聞こえますから。

改憲審議に絶対応じない、ということが今の野党にできるかが問題です。憲法審査会を強行するかもしれません。そして閉会中に9条には手をつけないからという裏工作を公明党とする。憲法9条に自衛隊入れなくたって、集团的自衛

権があるんです。ですから、この国会はたいへんだなと思っています。

8月末か9月初め、安倍政権は公明党と、沖縄知事選に勝ったら今度の改憲で9条改憲には手を入れない、という約束を交わしたという噂を聞きました。

「将を射んと欲すれば先ず馬を射よ」と言いますが、馬は公明党なのです。今回の沖縄選挙ではっきりしたのは、自民党単独ではなにもできない、ということです。自公が固まって初めて勝てる。公明党の助けがなければ。それが今回の沖縄戦でよくわかりました。

これまで、創価学会は辺野古基地建設反対と言ってきたのです。それなのに今回の選挙では賛成しろと言う。ところが、会員のなかから三色旗(創価学会の旗)を持って玉城支持という人がでてきた。沖縄にはそういう人がいたんですね。本土からも、愛知の会員が玉城応援のためにやって来ました。学会が大量に動員をかけたので、飛行機が満杯でソウル経由で国際線使って那覇に来たそうです。そして、期日前投票で会員の1/3くらいが玉城に投票したと言われています。いや、蓋を開けたら半分だったとも言われているのです。

創価学会が公明党を応援する、それは仲間なんだからいいのです。だけど上から言われたからこっちに入れる、これは自由ではない。民主主義でもなければ自由でもない。本当に信心しているならもっと自由になっていいはず。沖縄選で負けたことについて、学会や公明党山口那津男代表は責任を取るべきだと思います。会員を動員しておいて、負けたら知らん顔はおかしいです。

私が「基地引き取り運動」を始めるまでのこと

■ 漆山ひとみ（新潟教区信徒・沖縄に回答する会@山形）

今朝（11月14日）のミサの朗読箇所は「愛するものよ、人々に次のことを思い起こさせなさい。支配者や権威者に服し、これに従い…」と言う使徒パウロのテトスへの手紙（テトス3・1-7）でした。私はドキッとしました。教会の人から私の沖縄基地問題への関わりを咎められているような気持ちがいつも心の片隅にあるからです。でも、しばらくして祭壇の右にある十字架のイエスの手首を見て、私の支配者、私にとっての権威者は国体でも政府でもないことに気がつきなぜかホッとしました。

辺野古の海を埋め立てて、基地を造ることに反対している人たちが、カヌーを漕いで反対していること、道路に座り込んで反対していることは、新聞で見て少しだけ知っていました。海を埋め立てて基地を造るなんて、ひどいことを考えつくものだと思っていました。でも、そんなことが許されるはずはないと思って、新聞を閉じるともう、そのことを考えることはありませんでした。私は何もしていませんでした。それに、長い間、仕事を最優先にしながら、四人の子供たちの学費のために働いていたような生活でしたから、沖縄のことまで考えられないでいました。

そんな私が沖縄に関心を持つようになったのは、2015年の夏。夫からもらったiPadで毎朝6時に辺野古のゲート前から届く投稿を目にするようになった頃からでした。反対行動が始まる夜明けのキャンプシュワブゲート前の画像と座り込み〇〇〇日目と書かれたボード。いつの頃からか、その画像の投稿をみて「おはようございます」とコメントをしてから朝のミサに出かけるようになっていました。

初めて沖縄に行ったのは、16年10月。「カト



リック東京教区正義と平和委員会」が主催したツアーに誘って頂いて高江のヘリパッド建設反対の座り込みに行きました。台風の翌日、訪れた高江の山中の路上は異空間でした。200人以上の機動隊がいたのでしょうか、そして座り込みに参加している私たちもそれ位いたと思います。その日のことは、地元の老人から罵声を浴びせかけられながら、黙って並んで立っている本土からきた機動隊の青年たちの幼い顔が印象に残っています。なんというか、罵声を浴びせかけられているのは私だと少し感じたのです。私と、あの本土から動員されて来た機動隊の若者に、それほど差異はないように感じられました。

その日、機動隊の力に抵抗し頑張りましたが、まもなく私たちのほとんどが道路ぎわに拘束され、工事車両が何台も通り行くのを見送り、その後、解放されて道路の真ん中を自由に歩きながら感じた不思議な気持ち、小競り合いを遠巻きに眺めながら、なにか映画撮影のセットの中にいるような、実は全てにシナリオがあって、私は群衆のエキストラを演じさせられているような、どこかで誰かがこの群集劇を見ているような気がしたのです。でも翌日、帰りの飛行機の中で、また沖縄に来よう、また沖縄に来たいと思っていました。できることなら沖縄に住んで毎日、基地に反対して座り込みたいとすら思

いました。

それからは、朝と夕方に犬を散歩させながら思うのはいつも沖縄のことでした。山形の海岸を歩いては、どうしてこの海ではなく、辺野古の海が埋め立てられるのだろう、山を歩いては、どうして山形の空にはオスプレイが飛んでいないのだろう、田んぼのあぜ道を歩いては、どこまでも続く広い庄内平野にフェンスはない、白鳥の群れが自由に飛来する平和な景色が広がっている。それなのに沖縄は…どうして沖縄にはたくさんの基地があるのか…

それが私自身の無関心と差別だとわかったのは、基地引き取りを真剣に考えるようになってからでした。

「辺野古が唯一」と繰り返す官房長官の言葉を聞く度に、「庄内浜でもいいんじゃないか」と思いました。全国から声を上げれば、政府も「辺野古が唯一」と言えなくなるんじゃないかと思いました。もちろん心の中でそう思うだけで、口にするとそれは冗談とも本気とも言えないようなものでしたが、「基地問題を全国で考えて下さい、公平に負担して下さい」と言う翁長雄志知事の訴えを無視することはできないと思いました。そして翁長知事の「魂の飢餓感」という言葉にとっても驚きました。そんな言葉を口にする政治家がいるのかと思いました。お祈りの詩篇が心に浮かびました。「魂の飢餓感」この言葉は、忘れることのできない言葉になりました。

私は、基地はどこにもいないと思っています。でも、思っているだけでは、基地に反対と言ってるだけでは、基地は魔法のように消えてくれません。本土の私たちがやるべきことは、今まで沖縄に押し付けてきた基地を本土に引き取ることを考えるようになりました。それでも、私は心の中でそう思っているだけで、まだ誰にも「基地を引き取ろう」とは言えませんでした。



二度目に沖縄に行った時のことでした。普天間基地の前でゴスペルを歌う集会に参加した時、尊敬していた牧師さんに出会って、私は嬉しくて「山形から来ました」と声をかけ挨拶をしたのです。そしたら彼は少し怒ったように「それなら基地を一つ山形に持って帰ってくれ」と言ったのです。私は「そうですね…」というのが精一杯でした。私は思いました。心の中で思っているでもやらなければ、それは言い訳です。言い訳はもうできません。したくありません。だから行動しようと、その時に心に決めました。

これまで社会的な活動は何もしてこなかった私のような蕎麦屋のお母ちゃんまでが、「本土に沖縄の基地を引き取ろう」と言うようになるまでに変えられたのです。本当に不思議なこと、神様のみこころは計り知れないと驚いています。「基地を本土に引き取る会をつくりたい」。基地に反対している仲間に初めてそう言った時、私に浴びせられた言葉は「そんなことはできない」「無責任なことを言うな」「沖縄にも基地に反対しない人はいる」でした。「沖縄の基地を本土に引き取ろう」、そう問いかけるのは少し勇気がいります。誰にも喜ばれません。だから大変言いにくい言葉です。そして、その答えに人の心が垣間見えてしまいます。

「戦争・力の文化から、平和・愛の文化へ」 —核なき世界をめざして！—

(9月29日カトリック麹町聖イグナチオ教会ヨセフホール)

■ 対馬直美 (東京教区信徒 瀬田教会平和を願う会)

講師のステイブン・リーパー氏は、広島平和文化センターの前理事長であり、原爆を肯定的に思っている人がいまだ多くいるアメリカ全州にヒバクシャと共に原爆の被害を語ってまわった勇気ある方でもあります。前半は「イエスの目から見た核兵器」というテーマで話していただきました。地球の気候変動による海水の酸素欠乏で、海の生物が生息できない「デッドゾーン」の増加の一途で、このままいけば2048年には海は死んでしまう…人間は自分の生活、便利さを優先させ遂にここまで来てしまったが、ではどうしたらよいのか！リーパーさんはご自身の過去を辿り、率直な言葉で多くの参加者を前に分かち合ってくださいました。経営コンサルタントから平和活動家へ。核廃絶に賛成は味方、反対は敵という対立の構造ではない何か別の方法はないものかと考え始め、人間ではどうしようもない現実の壁を前に、神の力しかないと思いはじめたこと。自分のエゴを捨て、神を信頼し、神が何を求めているかを考えるようになった時、自分の思い通りではなくとも考えていた以上にうまくいくことが多いことに気づいたこと。イエスが馬小屋で生まれた意味、最後は十字架の苦しみを受けられた意味は、競争しなくていい、金持ちにならなくていい、愛と平和が悪と死を超えるのだというメッセージではないか。

暴力競争奪い合いが、地球を壊し続けている今、正義をかざして平和を守るという歴史が過去にそして現代社会にもあるが、正義が平和の前に来ると正義も平和も来ないのだ。大事なものは皆同じ地球人という人類共通の場に立ち、地球に生きるすべての人が幸せになるためにどうしたらよいのかを考え地球の声を聴くこと。そこに平和文化ははじまっている。それが、悪と

死を超え平和と愛に生きたイエス、敵を愛せよというイエスのメッセージを生きることなのではないか、と投げかけて前半が終わりました。

中盤のゴスペルの歌。厳しい現実を見ると絶望感でいっぱいになるが、絶望の中にこそ神は必ず働いてくださる…私たちの思いをはるかに超えたところで。だから私たちには希望がある！愛されている喜びがある！その思いを歌に込めて一人一人に届けました。

後半のテーマは、「核兵器廃絶と日本の使命」でした。昨年核兵器禁止条約が採択され、ICAN核兵器国際キャンペーンがノーベル平和賞を受賞し、今こそ核兵器廃絶が現実に近いチャンス！広島原爆の100倍の威力を持った核を持ってしまった今、核を使われたら想像を絶する被害を被る。核兵器廃絶に向かって世界が動いてきた流れを辿り、核を持たない国が禁止条約を作ることも丁寧に話してくださいました。広島、長崎、福島で核の被害を受けた日本は世界の中でも核の痛みが一番わかる国である。痛みのわかる国として世界をリードする義務がある。今こそ日本人が協力しヒバクシャアピールをしよう！世界は「核はない方がいい」と訴えている！70年に渡りヒバクシャが闘い続けてきたことに感謝したい！その力を直ぐに発揮できるのはまず宗教団体ではないだろうか。キリスト教の動きとしてすべての人に働きかけてほしい。日本が全世界の平和のリーダーになってほしい。熱い思いをストレートにぶつけてくださったリーパーさんの力強く愛に溢れた言葉に心が打たれました。感謝ばかりです。私たちは思いをまっすぐに受け止め、リーパーさんへの感謝と諦めない決意の気持ちを込めて大きな拍手で応えました。

平和に向かう道—川をさかのぼり、泉を探す

「さあ、立て。ここから出かけよう」(ヨハネ14・31) 平和の聖母とともに

■ パク・ユミ (フリーランサー)

教会暦では、今は到来される平和の王、キリストを待ちつつ新たな一年を開始する時です。平和の起源が、具体的、切実に祈られる時間！

朝鮮半島の平和、北東アジアの平和、世界の平和…。旧年は「平和」の祈りがますます具体的な形をとり切実に迫ってきた年でした。それを送る今、私たちは新たな年に向かい、主が望まれる平和に進む力がさらに満たされるように願い、流れに逆らいつつも、平和の源を見つめます。

十字架なしの復活がないように、平和を成し遂げるためにも、金と権力で飾った悪と悪の誘惑に抗い、善を選択し、困難を背負って忍耐しつつ進まなければなりません。

弟子を派遣された主は、指示の最後に「私は平和をもたらすために来たと思っているのか？ 剣をもたらすために来た」(マタイ10・34)と言われ、自分の十字架を背負い、誰よりも主を愛して従うようにと言われました。十字架に向かう時に弟子たちに残した言葉も同じ脈絡です。「私はあなたがたに平和を残し、私の平和をあなたがたに与える。私はこれを、世が与えるように与えるのではない。あなたがたの心を騒がせるな、恐おびえるな」(ヨハネ14・27)。常に平和を語り、平和の使命を弟子たちに残された主は、その平和が、世界の見方とは異なる平和、分裂を引き起こす「剣」だと語られました。当時の平和とは「法的行政力と力」による多くの民族を抑圧して達成される「ローマの平和 (Pax Romana)」でした。イスラエルの民は、その下で苦しみました。しかし「分裂」といっても、主の言わんとすることは、抑圧されて苦しむ人々の声が尊重されるようにすることでした。それが、主が望まれる平和への道。「さあ立て。ここから出かけよう」(ヨハネ14、31)。弟子たちには理解できずとも、彼らを勇気づけた主は、復活の栄光のために経ねば

ならない道、十字架の苦しみが待つ場所に大胆に進まれました。動揺せず、ひるまずに…。

復活された後、主は絶望と恐怖に陥った弟子たちに平和を見せてくださいました。そして世界の果てにまで主の意志を伝えることを命じ、そのために世の終わりまで共にいてくださると約束されました。

十二弟子！ 小さな泉からの水は多岐に別れましたが、その流れが一つの方に一緒に流れるように道が開かれました。主が再び来られるときまで。世界の平和を成し遂げねばならぬ私たちにも。

伝統的に待降節には、神のご意志に従いキリストをこの世に生み出された聖母をほめ「天よ、露を滴らせ」と歌いながらミサをささげます。ろうそくの灯に、闇を照らす光を待つ心を込めました。暗闇の中でも、ただ一つの光、キリストの光だけを見つめて、痛みと栄光を主と共にされた聖母。多くの信者はそれゆえ、聖母の信仰と生活を倣おうと、困難の中で、マリアの取り次ぎを願いました。個人だけではなく、国家も聖母に保護と助けを求めました。第一次世界大戦下の、1917年、教皇ベネディクト十五世は、戦争を止め平和を成就するために、16世紀から伝えられる「平和の元后」に委託する信心を蘇らせ、聖母の連祷の祈りに「平和の元后」を加えて祈ることを呼びかけました。自分の国のためにだけではなく、すべての人々のいのちと平和のために。聖母はいつも私たちのために取り次いでくださいます。

私たちが平和のために努力するとき、聖母はいつも共にいて務めを成し遂げてくださいます。正義と愛の実りである平和は、私たちの課題であり、また贈り物。私たちは聖母と共に祈り、平和実現の道へ「さあ立て。ここから出かけよう！」



読者の方から「ボストランテの石橋さん」6月・8月号の内容について、修道生活について誤解を招くのではないかと、のご意見がありました。ご意見を深謝し、今後は、そのようなことのないよう、十分留意いたします。これからもご愛読を、どうぞよろしくお願いいたします。(事務局)

- 1 特集 イデオロギーよりアイデンティティ
- 2 沖縄基地問題の「現実」対応 屋良朝博
- 4 宮古島で今、何が起きているのか? 坂口聖子
- 6 高江は今... 伊佐育子
- 7 報告 平和をつくり出す宗教者ネット集会(11月8日、参議院議員会館)「宗教と政治 沖縄県知事選挙をふり返って」 二見伸明
- 8 私が「基地引き取り運動」を始めるまでのこと 漆山ひとみ
- 10 報告:講話とゴスペル「戦争・力の文化から、平和・愛の文化へ」— 核なき世界をめざして! — 対馬直美
- 11 連載第14回 小さな泉が川となる パク・ユミ
- 12 まんが「修練者の石橋さん」

表紙写真 米国グアムでは、沖縄の基地負担軽減という名目で米軍の実弾射撃訓練場が造られようとしています。写真は、高江ヘリパッドにいない住民の会が、昨年2017年10月25日、グアムを訪問した際の様子です(右から5番目は、伊佐育子さん。p.6 参照)。

イエズス会
より

万国津梁—沖縄、東アジア平和の焦点

正義と平和 えとせとら...

各地
からの
報告

11月初旬、玉城デニー知事誕生後の沖縄を訪ねました。2年前、社会使徒職にかかわる日韓イエズス会員たちによって、海軍基地建設が進むチェジュ島で行われた交流に引き続き研修でした。

まず平良修牧師、2月に那覇教区長に就任されたウェイン・バーント司教、歴史家の又吉盛清氏の講話をうかがいました。それぞれテーマは異なりますが、沖縄が経てきた歴史の悲しみと不当を訴える声が、一つになって聞く者の心に響いてきました。

南部戦跡、辺野古などを案内してくださった現地の方に、県知事選挙で沖縄の基地反対の意思ははっきりしたにもかかわらず「知らぬ存ぜぬ」で工事を続ける政権にについてどう思うかと尋ねると「いつものことだ」と意外と平然としておられました。辺野古で基地建設反対の声を淡々とあげ続ける多くの人々を見て、この粘り強さを学ばねばと思いました。

嘉手納基地を遠望しているとき、ベトナム出身の神学生がとても苦しそうな表情をしていました。ここから飛び立った爆撃機が故郷を空爆したからです。韓国のメンバーも、自分の国がベトナム戦争に参加したことを語りました。又吉氏からは、日本の台湾侵略において沖縄が果たした役割について教えていただきました。東アジアにおいて、加害者と被害者の立場は互いにかみ合っているようです。最も責任のある日本国民として、ウェイン司教の紋章に記された「ちむがなさ」、すなわち「肝が哀しい、心からいとおしむ(聖書の「スプラUNKニゾマイ」=ハラワタする)」の霊性において平和を祈り、東アジアの連帯を始めねば、と思いました。

光延一郎(日本カトリック正義と平和協議会秘書・イエズス会)

